

特別支援教育における主体的・探求的な学習を考える（2） —学習への参加と意味づけの過程に着目して—

企画者	司城紀代美（宇都宮大学大学院教育学研究科）
司会者	岡澤慎一（宇都宮大学教育学部）
話題提供者	絵面悦子（栃木県立のざわ特別支援学校） 井澤光子（那須塩原市立黒磯小学校）
指定討論者	村山拓（東京学芸大学総合教育科学系） 司城紀代美（宇都宮大学大学院教育学研究科）

KEY WORDS: 主体的 探求的 意味づけ

【企画趣旨】

次期学習指導要領案では「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善をさらに充実させ、子どもたちが生涯にわたって能動的に学び続ける学習者となることが目指されている。

学習者が能動的に学ぶその過程には、学習をどう意味づけるのか、どのように学習のコミュニティに参加するのかといった社会文化的な側面が関係するとされる（鹿毛，2013）。主体的に学ぶということは、その活動が学習者にとって意味あるものとして意識されることであるといえ、そこから探求的な学習が広がっていくと考えられる。

特別支援教育の文脈においても、子どもが「何ができるようになったか」という視点だけでなく、どのように学習の場やコミュニティに参加しているのか、そこで子どもが自分の学習をどのように意味づけているのかといった観点から考える必要があるといえるだろう。その際、教師や周囲の子どもたちとのかかわりがどう影響を及ぼしているのかについて詳細にとらえていくことは重要であるといえる。例えば、Méndez, Licasa, & Matusov（2008）は、知的な障害のある子どもと教師とのやりとりの中で、教師が知識を伝達するという伝統的な役割から、ともに共同体を構成する学習者という役割へと変化することが、教師と子どもが協働して問題を解決する関係性を構築することにつながると指摘している。教師が必要な情報を与えるのではなく、教師と子どもがともに必要な情報を探索し、お互いに確認しながら課題解決に向かうことで、子どもが学習の主体となって活動することが可能になるのである。

本シンポジウムでは、障害種や学校種の異なる実践報告の中から、子どもが教師や周囲の友達とともに学習の意味づけを共有しながら主体的・探求的に学んでいる姿を見出し、その意義について検討していく。

なお、実践報告については研究協力者の了解を得ている。

【話題提供者の趣旨】

1. 肢体不自由特別支援学校での実践（絵面）

肢体不自由特別支援学校高等部1年の脳性まひの女子生徒Mとの係わり合いについて報告する。

Mは知的にも身体的にも重い障害があり、視線や身体の動きで自分の気持ちを表現する。しかし、係わり手（以下、E）に気持ちが伝わらないと伝えることを諦めてしまうことも多かった。そこで、Eの係わり手としての姿勢を見直し、Mの表出をすべて意味のあるものと捉え、Mの気持ちに想像を巡らせやり取りを重ねながら学校生活を送るようにした。本報告では、MとEが共に取り組んだ「探索活動」の場面について取り上げる。

スイッチを用いて電動車椅子を操作し、校舎内を探索した場面では、Mのイニシアチブを大切にしながら探索活動を行うことで、Eに向けられたMの表出は活発になり、車椅子を押されているだけでは見られない表情や自発的な身体の動きが見られるようになった。それに伴い、探索場所も広がっていった。

この取り組みから、限られた表出の中にある子どもの想いに想像を巡らせやり取りを重ねながら活動を共にする係わり合いは、障害の重い子どもの主体的な活動を支えることに繋がると考えられた。本シンポジウムでは、活動の意味を共有していく過程について検討する。

2. 通常の学級での実践（井澤）

勤務校で「通常の学級における特別支援教育」を研究テーマとして取り組む中で、支援を要する子どもたちに個別支援を行い、できることが増えていけば集団での活動が可能になるのではないかと考えていた。しかし、その一方で学級の多様な子どもたちが興味関心を持って主体的に取り組める授業づくりができていないのではないかという思いがあった。そこで、支援が必要な子どもと周りの子どもをつなぐような授業をつくる必要があるのではないかと思い、授業の中で考え話し合う場面を設定することで、子どもの変容がみられた。子ども同士のやりとりから、自分とは違う思考や視点に出会ったとき、子どもたちの思考は活性化され、活発な話し合いになることがわかった。子ども同士が相手の発言を学習と関係させて意味づけることができるとき、支援が必要な子どもも含めて一人一人の子どもたちが学習に参加できるのではないだろうか。その際、教師が子どもの考えや思いを受け止め、周囲の子どもたちへとつないでいくことが重要であると考えられる。石井（2006）は教師の受け止めが大切である理由を「それは『学ぶ』ということが、子どもの中で発酵し熟成し、そこからある種の喜びをともなって成立するものだからである」としている。

本シンポジウムでは学校全体での取り組みも含め、通常の学級における授業実践の報告を行う。

【指定討論者の趣旨】

実践報告をもとに、さまざまな障害や背景を持った子どもの学習活動をどのようにデザインすることができるのか、それは子どもの中でどのように意味づけられるのかを検討していく。また、子どもが主体的・探求的に学習に参加している姿を子どもの言動からどのようにとらえることができるのかについても考えていきたい。

（SHIJO Kiyomi, OKAZAWA Shin-ichi, EDURA Etsuko, IZAWA Mitsuko, MURAYAMA Taku）